

研究ノート

アメリカ仏教史から見る世界開教のあり方

川口智徳

一、はじめに

世界開教を研究調査するにあたり、日蓮宗が一〇年前に開教をスタートさせたハワイ、そして、来年一〇〇周年を迎えるアメリカの歴史を振り返ることから始めることとした。その理由には、日蓮宗が開教をスタートした土地がハワイであり、アメリカ本土であることから、その歴史的背景から探る必要があるためである。そして、アメリカ開教の調査を通して、過去にも未来にも、アメリカで布教を展開する上で、日系人という言葉が非常に大切な存在であると共に、大切なキーポイントでもあることに改めて気付かされたのも事実である。そこで、当研究調査に於いては、アメリカへの布教をベースとして振り返り、如何に開教布教を進めていけばよいのかを考慮し、世界開教への一助となればと考え、布教方法の研究調査を進めることとする。

二、アメリカにおける布教の歴史

アメリカ仏教団 (BCA Buddhist Church of America) の歴史は、十九世紀末より増加した日系移民に対する教化

活動が端緒となってくる。そこには、苦しい生活を強いられていた移民たちから、異国で自己の信仰の拠り所を求める声が強く、僧侶派遣の要請がなされ、アメリカ仏教教団が確立されていった時代背景が伺える。

また、日蓮宗が、アメリカに布教を始めたのは二十世紀始めの頃である。二十世紀の初期より日蓮仏教を学ぶ幾つかのコミュニティが存在していたため、一九一四年にロサンゼルス（カリフォルニア州）に日蓮宗で初めての仏教寺院が設立された。それに続き二年後の一九一六年にシアトル（ワシントン州）にも設立された。そして一九二二年には、サンフランシスコにも設立され、数年後正式に北米日蓮宗仏教教団（NONA）が西海岸で設立された。その後、教線は拡張され、サクラメント、ポートランド、バンクーバーと寺院が設立されていった。しかしながら、第二次世界大戦が開戦され、日本人、日系アメリカ人の留置などの様々な障害を受け、バンクーバーの寺院は閉めざるを得ない状況に追い込まれが、その後、日蓮教団はアメリカ人と戦い、シカゴ、トロント、ソルトレイク、サンノゼ、ボストン、ヒューストン、ラスベガス、シャーロット、ニューヨークなどで現在、布教活動を行っている。

三、日系人の歴史について

三―一 日系人のアメリカ移住の経緯

一八八四年、日本政府は海外移住希望者に、契約移民として出国することを認めた。日本人の多くが、アメリカは大きくて、とても豊かで、望みどおりのことができる国だと考えていたことから、昔の日本人の中には、アメリカは希望の満ちあふれた国だと考えていたようである。

三―二 日系アメリカ人と日本人の強制収容

日本人が移民して約四十年後、一九四一年十二月七日に真珠湾攻撃がされた。（真珠湾攻撃は休日である日曜日

狙ってハワイオアフ島真珠湾にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊と基地に対して、日本海軍が行った航空攻撃および潜航艇による攻撃)その翌日、アメリカ政府は、日本に対して宣戦布告し、日本人移民に疑惑を持ち始め、アメリカ国民から日系人に注がれる視線にはあからさまな憎悪が芽生え始めた。その結果、ハワイのアメリカ国民を大量殺戮した日本軍への恐怖と憎しみが、そのまま在米日系人へと向けられることとなった。

結果として、日系アメリカ人が国家の安全保障の脅威になるという口実のもと、フランクリン・ルーズベルト大統領は大統領令九〇六六号(西海岸に住む日系人は、ただちに住居を立ち退いて所定の仮収容所に集合すべしという命令)に署名し、十二万三百十三人の日系アメリカ人は、住んでいるところを強制的に立ち退かされ、全米の十ヶ所の強制収容所に送られ、終戦まで収容され日系人たちは辛い生活を余儀なくされた。その後、日系アメリカ人により構成された第四二連隊戦闘団のヨーロッパ戦線における活躍などにより、日系人としての地位が確立されるも、日本人・日系人の中には、アメリカ人に対する憎悪感というシコリが残ってしまった。

四、シアトル日蓮仏教会から発生した日系人問題

シアトル日蓮仏教会は、一九一六年、当時シアトルにいた日本人達の熱い要望により始まった。現在の建物が一九二九年に設立されてから、八十年近く歴史のある仏教会であり、戦時中も心の依りどころ、仏さま、ご先祖、そして日本との架け橋として大事に護持されてきた。

シアトルの日系人の歴史を顧みても、シアトル在住日系人もやはり、「イエロージャップ」と呼ばれ、アメリカ政府より戦中、収容所への強制収容を余儀なくされた人々であり、長年培われたアメリカ人に対するジェラシーや怒りに近いような感情を根強く抱いていることは言うまでもない。

そこへ、シーダーマン観心師が二〇〇八年八月三十一日に赴任された。シーダーマン師は、赴任された当初より、

日蓮宗が伝道宗門であるが故に、日系人だけではなくアメリカ人にも布教を展開していった。しかしながら、日系人のメンバーの心境を鑑みると、自分たちの大切な心の依り処に、アメリカ人教師がやってきて、「自分たちと日本、そしてご先祖さまとの大切な架け橋」であり九十年近く守り続けてきた大切なお寺の各行事をオフィシエート（導師）されることは、心の奥底ではあまり良いものではなかったと考えられる。シーダーマン師は、その後二〇〇九年五月に地域の治安向上をはかり、地域環境の見直しセレモニーを行った。二〇〇九年七月に立正安国・お題目結縁運動をメインテーマに掲げ、NONA（北米教団会）の会議を招致し、和讃の研修会を行ったり、参加者と共に地域を行動して布教をしたりと、とてもアクティブに布教活動をされていた。

その一方、節分会などで大黒天神役をアメリカ人が扮し行事を行うなど、アメリカ人信者中心に行事などの布教活動を進められていく行事が多くなってきて、その結果、日系人との間に徐々に歪みが生じてきていた。

このことは、先祖よりアメリカという国家から理不尽かつ虐待的な生活を強いられてきたことから生じた歪みであると考えられる。日系人メンバーの心の根底には「アメリカ人に布教することなく、自分たちの先祖供養をさえてもらえれば良い」という考えが芽生えてしまう結果となってしまった。この問題は、アメリカの日系人を抱えている教会でもあり得ることであるが、結果として、二〇一〇年七月にお寺を出られて同年十月、シアトル日蓮仏教教会の近くにアメリカ人対象の円経寺というお寺を設立して布教活動をされている。一方、二〇一三年三月現在でも、日蓮宗に登録されているシアトルのお寺は不住職の状態が続いており、現在北米の開教師が巡回布教をしており、信仰を保っている。

シアトル日蓮仏教会 1042 South Weller Street, Seattle Washington 98104, USA

長栄山円経寺 501 South Jackson #202, Seattle, Washington 98104

五、日系人を多く抱えている寺院と現地人を多く抱えている寺院

では、次に日系人を抱えているお寺と、現地人を多く抱え両立しているお寺を、今度はアメリカだけではなく全開教区から考え、調査してみると、なぜ日系人が大半を占めているか、また現地人を主に布教をされているのか分析することが出来る。日本から志を持って海外布教に行かれ開教された土地では日系人が多く、その一方、現地人が多いお寺では現地開教師もしくは国際布教師が主任をしている。また、その場合の多くは、現地開教師が自宅をオープンにお寺として解放をして日蓮宗寺院が増えていったという背景も伺える。また、現地開教師の開いているコミュニティでは、元SGIや日蓮正宗の信者が多く、現地開教師のバックグラウンドもSGIや日蓮正宗の出身者が大半を占めていることが伺える。

また、布教をする上でも日系人とアメリカ人の歪めのようなものは、前述の通りアメリカと日本という時代背景を鑑みても、根深く残っている。ボストンやニューヨークなどの東海岸に多く見られることであるが、今でも中国人の住む地域、日本人の住む地域、ヨーロッパ人の住む地域、黒人の住む地域と棲み分けされる程、差別と言う事を無くす事が出来ないお国柄でもある。仏教という平等な宗教の中でも、矛盾は払拭できないが、アメリカ人にはアメリカ人向けの寺院・日系人には日本人向けのお寺というように考えて行かなくてはいけないのではないだろうか。現に、キリスト教に視点を置いてみても、アダムとイブが白人であったために、黒人を認めると教義から反するという視点より、黒人の行く黒人教会と白人の行く教会とすみ分けされていることは事実である。

五―一 日系人問題から考えられる世界開教の展望。(すみ分けと現地教師の育成)

シアトル日蓮仏教会の項目で上げたシアトルのモデルケースで考えると、日系人向けのお寺とアメリカ人向けのお

寺が既に存在している地区である。しかしながら、僧侶が片一方の日系人向きの寺院は、不在である。今後、このような事態が発生することも十分考えられることである。

その対策としては、二つの方策が考えられる。一つ目の対策は、同じ寺院で午前中は日本語の法要で日系人向け、午後は英語の法要でアメリカ人向けにと、配慮をしっかりとしていくという対策である。あと、日系人が大切に行ってお寺というイメージが強いならば、取れる方法としては、シアトルをモデルケースに考えると日系人向けのお寺とアメリカ人向けのお寺を二カ所設けるという方法も取れるが、一切衆生が皆仏子である法華経的な概念から考えると、一概にこの人種差別の問題を解決する方法を取れば良いというのも再考する必要があると考えられる。

二つ目の対策は、現地僧侶を育成し増やして、近くの地区に現地人向けのコミュニティを増やすという方向で考えていくというのはどうであろうか。もちろん、現地人を増やすことは、日本語の喋れない教師を増やすことを意味するので、宗務院との連動が困難になってくる事になり、現地人で単立日蓮宗を結成する可能性も秘めているが、日本人の開教区長を一人ポストとして置いておけば宗務院との連携は図れるのではないだろうか。

五―二 日系人と現地教師との関係性、現地教師の未来展望

しかしながら、前述と矛盾もまた生じてくるのも然りであり、日系人に対して、アメリカ人が布教をするということとはシアトルのケースを取ってみても大変難しい事であり、最善の考慮をしないとイケない。この問題に対して、日系人の主体寺院であるにも関わらず、アメリカ人にも布教を展開している、ハワイ島ヒロ教会の菅原法正師にお聞きしたところ、「アメリカ人に布教をするには、日系人を重視しケアしつつ、アメリカ人向けのお寺と日系人向けのお寺を両立させる事により、十分出来るのではないか。」と考えられている。

アメリカ人教師でも日本で修行を積んでいるのと、そうでないのと日系人の捉え方も違い、例えば日本の食べ物を

アメリカで育てるのと、純粋に日本で育てた物を輸入するのでは捉え方が大分違う」と考えられ布教をしていると答えられた。

また、全世界で言えることであるが、現地開教師のメリットは、何よりもその国の母国なので、帰る必要がないというメリットが挙げられる。大半の開教師は、骨を埋める覚悟で海外布教を志すが、お寺の事情などで帰国を余儀なくされるケースもある。その結果、寺院の主任が度々変わることで、コミュニティーの発展が発端になったとも言えなくはない。そういった意味合いから、アメリカで生まれたアメリカ人はその土地が母国であり、生涯を掛けて布教する事が出来る。また、SGIから信者になられた方々は、お寺の行事へ参拝すればするほど、現地人教師への憧れを抱き、自身も僧侶になりたいと発心を起こされる方が沢山いる。そういった理由からも現在、様々な海外寺院や結社でアメリカ人沙弥が多く生まれている現状にある。

六、近年における実際の沙弥事例

二〇一〇年四月	三日	得度式	Keishun Lefebvre		
			Ekan Calderon Vargas	菩提寺	妙見寺 (ヒューストン)
二〇一一年三月十九日		得度式	Jisho Rogers	菩提寺	妙声寺 (シャーロット)
二〇一一年六月三十日		信行道場	Myoran Gifford	菩提寺	トロント日蓮仏教会

※その他、スペインにおいてGabriel De Luca Garrofe氏が沙弥を志し、二〇一一年十二月〜二〇二二年二月まで摩耶寺 (安藤正道住職) において、日本語と僧道修行をした。

七、現地沙弥の育成方法（開教師・国際布教師）

では、宗門として上記のようなSGI・正宗やその他教団から沙弥が出た場合、沙弥をどのような方法で、現地で活躍する開教師がどのように手を差し伸べ、開教師あるいは国際布教師へ育てられるのかを、まずは現実的に考えていきたい。

七―一日蓮宗において僧侶に成るためには

そこで、実際に、信行道場を出るまでに経過しなければ行けない修行機関が宗門として幾つあるか、次に時系列で示す事とする。

修行、勉学名	場所	内容
得度式	菩提寺となる寺院	僧侶になるための最初の式。この式の後、沙弥として、僧侶の修行をする。
度牒式	清澄寺（千葉県）	「戒法」を受けて、法華経の教えを信じ、仏の徳を身に具えることを誓う儀式。
日蓮宗普通試験（乙種）	身延山大学（山梨県）	僧侶の基礎的な能力を図るテスト
僧道林	大本山本圀寺（京都府） 本山 清澄寺など	信行道場へ入場する満十八歳以上の沙弥を対象に開設されます。僧侶になるための基礎教育を中心に指導が行われる。
信行道場入場考査	各管区で実施	信行道場に入場するための読経試験

信行道場	信行道場 (山梨県 身延山)	僧侶(尼僧も含む)に必要な行と学の修練が行われる道場。修練期間は三十五日で、これを終了してはじめて日蓮宗の僧侶として正式に認証される。
------	-------------------	---

※上記の表でも分かるように得度式は、各海外寺院で行えるが、度牒の交付式から信行道場までを数えると、五つの修行を全て日本で行わなければいけないのが現在の宗門の現状である。

七―二 上記の修行期間を終えるのに経費はいくら掛かるのであろうか？

そこで、僧侶に成るための費用がいくら掛かるのか、実際に礼録を含めて考えてみることにする。前述のトロント日蓮仏教会で二〇〇八年に発心をされ、沙弥になり、二〇一一年に僧侶に成られたギフォード妙蘭師が、上記の信行道場を出るまでの費用を考えたこととした。

Air canada機を利用し、一番安いレートで利用した場合、次の料金が掛かってくる。

\$ 618 (航空券代) + \$ 731.20 (燃油サーチャージ、税金) = \$ 1349.20

日本とカナダと日本円で一回の渡航に一二万円ほど掛かる事が分かってくる。(ICAD = 八十九円)

そこで、得度式から信行道場までの上記の修行期間を六回全て来日すると計算して、十二万円×六回 = 七十二万円掛かることとする。もちろん、現地と日本国内での移動も含めれば百万円ほど掛かることになるだろう。そこに、各修行期間の礼録、宿泊費などを加えれば、僧侶に成ると外国で発心しても、百五十万円ほど掛かってくることになる。キリスト教、S G I などから発心をされ、自分と同じ立場の方々一人でも法華経の教えへ導き、一天四海の一人助になりたいと大願を抱かれてもそのような方々に対して、いきなり大きなリスクが目の前に立ちはだかる現状になっていることが分かる。

七―三 上記の問題を解決するためには

そこで、上記の問題を解決するために、二つ方策が考えられる。一つは、留学生を受け入れる体制を構築する。もう一つは、海外で信行道場までの修行を設置するという案である。

◆留学生を受け入れる体制を構築する。

現在、海外から沙弥を受け入れて、留学を受け入れた実績のある寺院がすでにあり、新宿 常圓寺（及川日周住職）と摩耶寺（安藤正道住職）、本久寺（持田貫信住職）である。摩耶寺は、二〇一一年十二月～二〇一二年二月までスペインよりGabriel De Luca Garrofe氏（タラビーニ勝亮師の弟子）が来日され、日本語の勉強と僧道修行をした。また、常圓寺は、左記の如く多数の僧侶を輩出している。

・常圓寺から僧侶に成った実績

エルフィンナ妙布（インドネシア）

二〇〇五年四月～二〇一二年 二十一年六月 特別信行道場修了

ソレンソン龍仁（アメリカ）

二〇〇六年～二〇〇八年 二〇〇八年五月 信行道場修了

アンデルソン英陽（ブラジル）

二〇〇〇年九月～二〇一二年二月 二〇一一年五月 信行道場修了

現地人を宗門で受け入れて、受け入れ先の寺院へ修行派遣するというシステムを構築することにより、現地で活躍する開教師も安心をして日本へ送り出せる事が可能になると考えられる。前述の海外から来日する修行よりも、航空

費を捻出することなく修行に専念できると考えられる。また、日本で研修することにより日本で日本人による日本教師を誕生させることが可能になる。

言うなれば、ハワイ開教区 菅原師曰く「メイド・イン・ジャパン」といったレットルの僧侶を誕生させられるのである。食品においても、日本で手塩を掛けて作ったものと海外で日本のものを作ったものでは、やはり海外の認識度を違う。アメリカ本土に於けることであるが、日本でしっかりと修行をされた現地人であれば、日系人にも幾分か安心感があるのではないだろう。何よりも、宗務院との連動も日本語が喋れることにより、スムーズに行えるように考えられる。

◆現地で信行道場までを修行する。

現地で信行道場を開設することは、宗制にも関わってくることなので、非常に難しいことであり、日蓮宗には、祖山信仰というものが根強く息づいており、身延山で修行しなければ日蓮宗僧侶と認められないという概念があり、信行道場は身延山で開設するという決まり事があることは言うまでもない。(宗制第十一号 教育規程 第十四条)

しかしながら、妙法蓮華経 如来神力品 第二十一に於いて、お釈迦さまは次の様に示されている。

『当に知るべし。是の処は即ち是れ道場なり。諸仏此に於いて阿耨多羅三藐三菩提を得、諸仏此に於いて法輪を転じ、諸仏此に於いて般涅槃したもう』

この課題は、世界開教師会議において、何度も話し合われていることなのであるが、お釈迦様がインドで法華経をパリー語で説かれ、中国に渡り鳩摩羅什師が中国語に翻訳をされ、日本に渡ってきた。今では、インドの言語で説かれたお釈迦さまの法華経を現地語でも中国語でもなく、我々は、日本語で「自我得仏来」とお読みしている。このことは、我々の都合上でそうしているだけではないのではないだろうか。

日蓮宗の世界開教を顧みれば、日本で開設される修行期間で修行を積み、日本語で法要式を覚えても現地に帰れば、法要式もお説教もすべて現地語で布教されている。果たして、お釈迦様でさえ日本語が喋れないのに日本語が必要なのであるか。また、アメリカなどの現地で修行を完成させることは、法華経の教義に間違いがあるのであるか。アメリカ日蓮宗、ヨーロッパ日蓮宗を構築しないといけないターニングポイントが既に来ているように考えられるのではないだろうかと考えられる。

八、おわりに

様々な問題（宗制・人材派遣など）をクリアーして修行道場を外国で開設するという仮定をしたとして、新たな問題が発生してくる。その問題は、外国人教師に日本語のスキルが本来に必要となってくるのか否かである。現地語で布教するのに、日本語で法要式を覚えないと行けないというのは、日蓮宗・法華経のグローバル化という意味では、一歩も二歩も後れを取ってしまったのではないだろうか。曹洞宗国際布教総監部はそれぞれ管轄する地域内において独自に宗務の統括をし、北米、ハワイ、南米、ヨーロッパ各地で布教活動を展開している。浄土宗では、日系人が減少傾向にあるので、既に対策を検討し、二年前に、ハワイ、北米、南米の総監、フランス、オーストラリア開教区の開教使を招いて、「明日の布教へのヒント」と題した講演を知恩院で行い、日系人を対象とした布教から他人種へ向けての布教へスイッチチェンジしようと正式に試みている。

イタリアのタラビーニ勝亮師、韓国の禹法顕師ともに、現地語へ法華経、法様式をアレンジして布教を独自にされ、活躍をされている。タラビーニ勝亮師は、「イタリアではイタリア語、フランスではフランス語、スペインではスペイン語で独自に経本を作成し布教をしている」と語っている。

そのような中、宗門に立ち返れば、しっかりと修行が積めるヘイワードに日蓮宗開教布教センターを設立したにも

関わらず、祖山信仰であるので、身延山久遠寺で行われた信行道場で修行を積まないと、僧侶と認められないというスタンスである。その一方、今後は、外国人沙弥がたくさん誕生し、僧侶を志されるであろう。その前に対策を練り、更なる布教方針を再考し、法華経・日蓮宗のグローバル化をする日が迫ってきていると考えられる。

参考文献

一九四一 日系アメリカ人と大和魂 筆者 すずきじゅんいち
アメリカ仏教―仏教も変わる、アメリカも変わる 筆者 ケネス・タナカ

WEB SITE

NONA (Nichiren Buddhist Order of North America) <http://nichiren-shu.org/NONA/>
日蓮宗海外布教センター <http://nichiren-shu.org>
新宿常圓寺 <http://www.joenji.jp>
浄土宗ホームページ <http://jodo.or.jp/>
曹洞禅ネット <http://www.sotozen-net.or.jp/>
Air Canada <http://www.aircanada.com>
Wikipedia <http://ja.wikipedia.org/wiki/>